

**新型コロナウイルス対応緊急支援助成
事業計画（実行団体）**

事業名(主)	孤立解消の為にコミュニティプレイスの運営
事業名(副) <small>※任意</small>	多世代が遊び・交わり・働く『ごちゃにわ』

入力数 主 20 字 副 20 字

実行団体名	手賀沼まんだら
資金分配団体名	NPO法人 ACOBA

優先的に解決すべき社会の諸課題

領域	分野
1) 子ども及び若者の支援に係る活動	<input checked="" type="checkbox"/> ①経済的困窮など、家庭内に課題を抱える子どもの支援
	<input checked="" type="checkbox"/> ②日常生活や成長に困難を抱える子どもと若者の育成支援
	<input type="checkbox"/> ③社会的課題の解決を担う若者の能力開発支援
2) 日常生活又は社会生活を営む上での困難を有する者の支援に係る活動	<input checked="" type="checkbox"/> ④働くことが困難な人への支援
	<input checked="" type="checkbox"/> ⑤社会的孤立や差別の解消に向けた支援
3) 地域社会における活力の低下その他の社会的に困難な状況に直面している地域の支援に係る活動	<input checked="" type="checkbox"/> ⑥地域の働く場づくりの支援
	<input checked="" type="checkbox"/> ⑦安心・安全に暮らせるコミュニティづくりへの支援

上記以外 その他の解決すべき社会の課題	(領域) 地域環境の保全に係る活動 (分野) 放棄地活用による防災、安全安心
------------------------	--

入力数 37 字

SDGsとの関連

ゴール
_3.すべての人に健康と福祉を
_5.ジェンダー平等を実現しよう
_8.働きがいも経済成長も
_11.住み続けられるまちづくりを
_15.陸の豊かさを守ろう

実施時期	2021年3月 ～ 2022年2月	事業対象地域	特定地域 (千葉県我孫子市)	事業対象者： (事業で直接介入する対象者と、その他最終受益者を含む)	近隣在住の子ども、父母、高齢者とその家族	事業対象者人数	1000世帯
------	-------------------	--------	----------------	---------------------------------------	----------------------	---------	--------

I. 団体の社会的役割

(1) 申請団体の目的
私たち団体の合言葉は、「野へ出よう、人に会おう ～子どもの遊びが流域をつなぐ～」です。現代の子どもたちには「外遊び」が不足しています。私たちが暮らす「地域」で「身体」を使って「遊ぶ」ために、現代社会の子供たちが失った「時間」「仲間」「空間」を、わたしたちが創り出します。この地縁コミュニティ創出の過程で、かけがえのない地域自然とわたしたち人間の暮らしを新しく紡ぎ直すことを目的とします。
(2) 申請団体の概要・事業内容等
手賀沼流域の自然の中で、親も子も本気で遊ぶ、子育て地縁コミュニティです。①NPO法人手賀沼トラスト内に「子ども部会」を設置循環型農業を実践しながら、里地里山で遊ぶ②水上スポーツ「SUP」をツールに手賀沼と遊ぶ③手賀沼フィッシングセンターでピオトープを創りながら生物多様性を学ぶ④子どもたちが先生になり流域資源を活用した遊びのWS、自分の“好き”をお金に換える「てがぬまこどもマルシェ」の開催など

入力数 (1) 193 字 (2) 198 字

II. 事業の背景・社会課題

新型コロナウイルス感染症により深刻化した社会課題
①子どもたちの「遊び」の喪失<休校=自宅待機と誤解した近隣住民の視線にさらされ、子どもたちの自由でのびのびとした「遊び」の喪失に拍車がかかった。外遊びによる体力向上や健康増進は、文科省が認めるところであるにもかかわらず、政策的な保証がない。未就園、未就学児における「遊び」の機会損失は、心身の発達においてより一層深刻な影響がある。身体を動かさないことによる感覚統合の遅れ、母親以外の人間とのコミュニケーション困難など。②親子の孤立<地縁もなく子育ての悩みを相談できる相手もおらず、親だけで子どもを育てる「孤育て」。緊急事態宣言下では公園へ行っても遊具は使用禁止になり、子ども同士の触れ合いも制止せざるを得ず、ママ友との立ち話でさえ「密」とされ、自宅に籠もらざるを得ない現実。日中の子供の声を騒音みなされ、近所からの苦情に怯えながら、閉じた空間で長時間親子が家庭で顔を突き合わせているストレスは高く、虐待やDVの深刻化も懸念される。同様なことが社会的弱者である高齢者にも当てはまる。③ワーキングマザーへの負担増加<共働き世帯で約8割の男性が家事を全く行っておらず、約7割の男性が育児を全く行っていない(内閣府男女協働参画局『平成28年社会生活基本調査』の結果から～男性の育児。家事関連時間～平成29年10月より)ジェンダーギャップによる負担がコロナにより一層増した。テレワークが推奨され、保育園ではテレワークであれば自宅保育を勧められてしまう現状。④子どもの貧困<子供への支援で世界的にも先進国であるドイツでは、「遊び」からの貧困対策を実施している。子供の遊びが子供自身の主体性を最も発揮し、自分で生きていく力を身につける。子供自身にアプローチし、貧困の再生産を食い止めようとしている(「子どもの貧困と遊びに関わるNPOの連携-ドイツの事例から 木下勇著 2017. 10「学術の動向」より引用)

入力数 799 字

III.事業内容

(1)事業の概要
<p>コロナ禍でも安心して過ごせる空間「ごちゃにわ」を創出します。対象は①④居場所のない子どもや、②子育てに課題を抱えた母親や父親、話し相手の欲しい高齢者、③子どもを見ながら働かざるを得ない親、冬越しの場所を求める生物など。場創りの過程から場に関わる人皆んなが主体性を持って協働し、場の運営についても合意形成を諮りながら決めていく。各世代の孤立解消のツールとして「ごちゃにわ」がどのように機能するかを実験する。会員制度、場づくりのプロセスなど多様な協働の仕掛けを実施し、コロナ禍で一層希薄になったコミュニティを紡ぎ直す。</p>

入力数 258 字

(2)事業実施後（1年後）以降に目標とする状態
<p>「ごちゃにわ」が地域住民と協働で運営。コワーキングスペース「かちやにわ」、短時間託児「こちゃにわ」、子どもの遊び場「わちやにわ」、しゃべり場「おちやにわ」、畑ピオトープ「ばちやにわ」。多様な入り口テストし、コミュニティプレイスに必要な機能を解明。当該事業スタートからのプロセス、利用者アンケートなどをまとめた冊子を作成し、各地に子育て中の親子が主体のコミュニティプレイスが波及することの一助にする。</p>

入力数 199 字

(3)今回の事業実施で達成される状態（アウトプット）	実施・到達状況の目安とする指標	把握方法	目標値/目標状態	目標達成時期
<p>① 孤立感を感じている住民が本事業の機能により孤立感が解消される② 孤立感を感じている住民にとっての孤立解消ツールとして「ごちゃにわ」が活用されている③ 「ごちゃにわ」の体験から、手賀沼流域での多様な外遊びが促進され、手賀沼流域の資源が親子で活用される。④ 手賀沼流域を活用した“遊び”の波及により、コミュニティの活性化が図られる。</p>	<p>① 延べ利用者数、延べ利用世帯数、来訪者の居住エリアを集計する② 会員を対象にアンケートを実施。各機能別の評価項目を入れる。③ 質的調査として当団体理事と本事業を活用する会員の対話による状況把握。④ 2022年2月に事業報告会を実施する。</p>	<p>① 高野山小学校児童にチラシを配布。また、高野山学区内にある幼稚園、我孫子市内の保育園にポスターを掲示し、事業を周知する。利用ごとにチケットや回数券を発行して利用者数を把握する。② web上にアンケート書式を用意し、事業終了までに集計、分析する③ 当団体の理事と当事業会員の対話を記録する④ 事業スタートから場の変化を写真したり、開催したWSの記録を取る。</p>	<p>① 市内でも特に「ごちゃにわ」設置予定の高野山学区内1664世帯のうち子育て世帯約500世帯（高野山小学校在籍世帯数）の70%が「ごちゃにわ」の存在を知っており、さらに40%の世帯が活用したことがある② 我孫子市内の子育て世帯30世帯が、毎月3-4回、継続してこの場所を利用する。③ 訪れた世帯のうち50%以上が、この場所に対して好意的な回答（良い、継続を望む）を寄せている④ 「ごちゃにわ」利用会員の孤立感とニーズをエピソードとして記録し把握する。⑤ 当該事業終了時には事業プロセス、利用者アンケート等をまとめた冊子を作成し、各地にコミュニティプレイスの取り組みが波及することの一助となるようにする。</p>	<p>事業終了時</p>

(4)活動	時期
地権者との契約、周辺住民へ事業説明・ご挨拶、開墾に必要な道具の購入、プロジェクトメンバーの招集、開墾開始	3月～
開墾継続、コワーキングスペースシステムデザイン検討、資材や物品の購入、WS開催	3月～
プレオープン（5月5日開催予定）、コワーキングスペース、遊び場の運用スタート、ピオトープ「ばちやにわ」造成（子どもたちと協働）、託児こちゃにわのシステムデザイン検討	5月～
小・中学生の居場所「わちやにわ」システム詳細検討とテスト運用（子どもたちと協働）	6月～
託児機能「こちゃにわ」開始、「わちやにわ」開始	9月～
秋冬野菜を作付け、カフェ「おちやにわ」機能運用開始、夏休みは子どもたちとDIY	7月～
里山資源を使った遊びのワークショップ、草刈り、本事業の運用で出てきた課題の洗い出し・課題解消の為の対策検討	秋
里山資源を使った遊びのワークショップ、本事業の運用での課題の洗い出し・課題解消の為の対策検討	冬
アンケート集計、事業まとめの冊子作成、事業報告会の開催	1月～2月

IV.事業実施体制

(1)メンバー構成と各メンバーの役割	<p>澤田直子（オーガナイザー、コーディネーター）、柏田麻実（資金運用管理、スタッフ管理）、柏田仁（事業運営指導）、藤倉たまき（デザイナー、ものづくりプランナー）、渡辺玲衣（生物調査と観察、ピオトープ管理）、澤田かほり（DX推進、事業システムデザイン）</p>
(2)他団体との連携体制	<p><アクティビティ調査助言>東京大学都市デザイン研究室、<農作業指導>自然野菜のら、<空き地活用助言>NPO法人balloon<プレイパーク運用助言>フリースクール子どものSONORA<ワークショップ協働>VIVITA JAPAN, INC<生活に課題を抱えた住民支援>我孫子市役所各担当課（子育て、高齢者など）、我孫子市社会福祉協議会、地域包括支援センター</p>
(3)想定されるリスクと管理体制	<p>① 「コロナ禍で集うことに対する批判。社会的弱者の排除」「ごちゃにわ」設置場所の地権者、近隣住民とのコミュニケーションを重ね、信頼を積み重ねていく。利用者全員がマナーを守る。② 「ごちゃにわ」での怪我>利用初日に利用者に対して協働の場であることを説明し理解を得た上で、利用登録をしてもらう。その際に、利用注意事項などを伝えて署名してもらう。利用登録料にはスポーツ安全保険加入料を含み会員全員にスポーツ安全保険に保険に加入する。③ 個人情報の流出>団体所有のiPadにて情報を管理し、施錠できる場所に保管する。④ 託児中の事故>託児スタッフは有償ボランティアなのでボランティア活動保険に加入する。</p>

V.関連する主な実績

(1)休眠預金以外の助成・補助金活用の有無			
コロナウイルス感染症に係る事業			
①本申請事業について、コロナウイルス感染症に係る助成金や寄付等を受け活動を実施している(予定も含む)		無	有の場合 その詳細
②本申請事業について、国又は地方公共団体から補助金又は貸付金（ふるさと納税を財源とする資金提供を含む）を受けていない	無	※有の場合、選定の対象外となります（公募要領：助成方針参照）	
(2)申請事業に関連する調査研究、連携の実績			
<p><子どもの居場所作り > ① 2019年度&2020年度、認定NPO法人手賀沼トラスト（1997年設立会員数150人）と連携し、「子ども部会」を設置。循環型農業を学びながら里地里山で遊ぶ。② 2020年度、子どもたちが先生となり、流域資源を活用した「遊び」のWS、自分の「好き」をお金に換える「てがぬまこどもマルシェ」開催 <手賀沼の水を守る農作物の自然栽培> 2019年度、自然野菜のらと連携し、自然栽培法とピオトープ畑の研修<生物多様性を学ぶ> 2020年度、柏市ふるさと納税制度を活用したGCFによるヌマラボスクール「生きものの住処を創ろう」継続開催<プレイパーク・フリースクール事業> 2019年度末、茨城県牛久市にあるフリースクール兼プレイパークsonoraの見学と意見交換。</p>			